

生徒たちが積極的に誇りをもって活動するクラブ

— 音楽する喜びと協力性を育てるために —

桜川中学校

1. はじめに

私が本校に着任して、最初に感じたことは、何とすばらしい環境なのだろう、ということであった。四方を緑で囲まれ、屋上から見ても緑が続き、まるで山の中の学校という感じで、とてもこれが東京の学校とは思えなかった。そして次に思ったことは、このすばらしい環境の中にいる生徒たちの心は、さぞ豊かであろう、ということであった。音楽という教科は、他の教科以上に感性に訴えかける教科であるし、また、それを磨いていく教科である。前任校で、生徒たちの心からなる音楽性、人間性、積極性を引き出し、全校生徒の心を「ハレルヤコーラス」や「大地讃頌」の全校合唱に一つにまとめることに成功して生徒たちの持つ、無限の可能性に感動していた私は、本校でなら、さらに、それ以上のことができるのではないかと、期待して新学期に臨んだのである。

ところが、新学期が始まると同時に、そんな私の浅かな夢は、一気に砕かれてしまった。入学式の式典の、何という味気なさ。まるでタイムマシンに乗って戦争前にも逆もどりしたような奇異な感じにとらわれてしまった。中学生としての第一歩を踏み出すはずの入学式にふさわしい感動がない。盛り上げる工夫もない。そして、決定的だったのは、レコードによって「君が代」が流されたことであった。およそすべての学校行事における音楽演奏は、すべて生演奏が当たり前、と思っていた私にとって、これは何とも言えない文化的ショックであった。ああ、この学校には音楽がない。音楽の喜びがない。そして、この思いは、以後の生徒たちの日常を見るにつけ、現実のものとして私の目の前に展開していったのである。

生徒たちの心は乾き切っていた。前年からの学校荒廃をうけて、御多分にもれず、本校でも程度は軽いとはいえマスコミで騒がれているような問題はひんぱんに起きていた。音楽という教科は、もろにそういう生徒たちの心が出る教科である。これではいけない。何とかしなければと悩み抜いた。そして、前任校で、行事を感動的に盛り上げることによって、生徒たちが生き生きと取り組み、一つになっていった過程を思い出し、少なくとも自分に今できそうなのは、音楽を通して行事を盛り上げることではないか、という結論に達した。折しも、職員たちの間にも今年からは何とかしよう、という気持ちも盛り上がって来ており、行事を盛り上げるために、ブラス

バンドを作りたいという私の気持ちを支えてくれて、ブラスバンド設立のための予算を、かなり多めにまわしていただいた。「秋の運動会には何とか間に合わせてよ」という仲間の応援に、「よし何とかしてみよう」と、ここにブラスバンド作りの第一歩を踏み出したのである。

2. 設立の過程

(1) 楽器集め

何しろ何もないのである。器楽部として前にあったクラブが使っていたクラリネットが4本とフルートが3本、それに、アルトサクソと、ユーホニウムが1本ずつしかない。これでは、およそ、吹奏楽としては成り立たない。特に低音楽器は高額であり、学校の予算では本校のような小規模校の場合、特別に買えない。幸い、校長から区からの貸与制がある、という話をきき、さっそく音楽部会でチューバを貸してもらえることになった。また区内の中学や小学校で、現在使用していない楽器をかき集めて修理をした。何しろ古い楽器が多いので、修理しなければ、使えないものばかりなのだ。それでも、何やかやと、30ぐらいの楽器が集まった。

(2) 部員集め

将来のことを考えると3年生ではすぐ卒業してしまうしということで、募集を一年生に限った。本校に来る生徒たちの出身小学校のほとんどは吹奏楽部はなく、楽器の名も知らないの、まず、授業の時に吹奏楽の演奏を聴かせてみた。そして興味を持った生徒を集めて楽器を



初めての運動会

決めた。

(3) 練習の方法

全くの初心者ばかりなので、一応音が出せるようになった段階で、実際に吹ける上手な生徒の演奏を前任校から呼んで聴かせた。また、知人のプロの人たちを頼んで指導してもらった。実際に自分たちが出している音と全く違う本物の音を耳にした生徒たちの意欲は、早くあのよう吹けるようになりたい、という気持ちに燃え上がったようだ。一学期は、教則本を基に、ロングトーンやスケールなどの基礎練習に終結した。パート毎にリーダーを決めその生徒を中心に責任をもたせて練習させた。

目標として、2学期の始業式での校歌、行進曲の演奏、運動会の開閉会式での演奏をすることを話しておいたので、それに向けてがんばろう、という気持ちが、はげみになったようである。

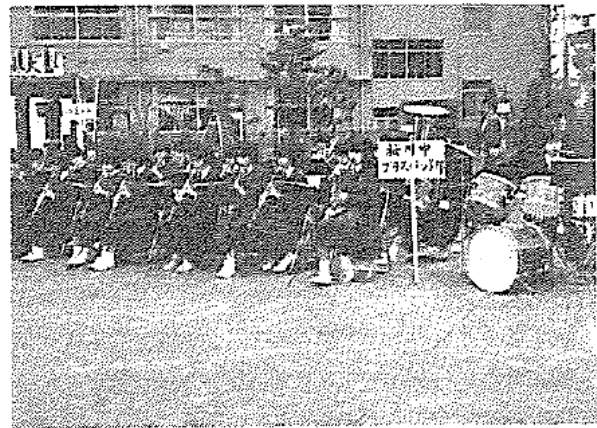
夏休みにはいって、校歌を編曲したもの、行進曲として「士官候補生」「旧友」などを渡して練習させた。

(4) 意欲を持たせるための考え方

連合音楽会やコンクール等を見ても、一番生徒が意欲を湧き上がらせるのは、努力の結果を他からほめられることである。はっきりいって、下手なバンドだ、という評価を与えられてしまうことほど生徒の意欲を低下させるものはない。そのためにも初めて演奏を公開するに当たっては、少なくともある程度以上のレベルに達していることが望ましい。従って多少なりともやはり練習には厳しさが要求される。いろいろな場面で「よかったよ」と言われることほど生徒たちにとって、あるいは教師にとってうれしいことはない。そういった点でも、数多く演奏の場を与えてやるというのは、絶対に必要なことである。演奏という行為は、どのような場合にしろ必ず聴衆がいるということを念頭に置いていなければならない。ただ自分たちで楽しむだけでは、レベルは向上しないものである。



定期演奏会でひとこま



さくら祭りに参加して

幸いにして始業式、運動会でも好評を得、さらに対外的にも、地域の運動会や行事等にも参加させていただいたことにより、生徒たちの中にも学校を代表して演奏しているんだ、というような誇りも出てきたようである。

また、父母等の理解を得ることも大切で、行事の度に連絡して、極力聴いてもらうようにしている。そのような働きかけを通じて、父母の中からも積極的に活動を助けてくれる動きも出てきたのは、大変に喜ばしいことであった。ちなみに、本校吹奏楽部の行事をあげておく。

- 4月 入学式、新入生歓迎演奏会、地区桜まつり
- 8月 吹奏楽コンクール
- 10月 運動会、地区運動会、区民祭
- 11月 青少年音楽祭、文化祭、連合音楽会、農業祭
- 2月 新人演奏会（1年生中心のアンサンブル）
- 3月 合唱コンクール、卒業式、定期演奏会

以上の他に各学期毎の始・終業式、離任式などがある。本校では3月に行う定期演奏会を、1年間のまとめとして最大の行事に位置づけており、この日は、父母は勿論家族、友人などに聴いてもらい、演奏を楽しんでもらうと同時に3年生にとっては最後の、また1・2年生にとっては3年生を送り出す感謝の会として、定演へ向けて、一丸となって練習にはげんでいる。コンクールは、他校の演奏を聴いて刺激を受けると同時に、参加することで技術をみがく手段としては有効である。

(5) その後の経過

前項のような行事を通じ、連帯感、喜びなどと共に、本物の音楽が少しずつわかりかけてきたようである。また、校内でも音楽の良さが、すこしずつ浸透していつているようで、文化祭などは皆楽しみにしているし、定演ではいわゆる問題児たちも感激して聴いてくれている。そういうことが、さらに部員の意欲を高めているようである。